

Entre Japon et Bresil : identites decalees (Between Brazil and Japan : identities out of places)

| | |
|--------|---|
| 著者 | CHERRIER Pauline |
| 号 | 12 |
| 学位授与機関 | Tohoku University |
| 学位授与番号 | 法博 第97 号 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/59461 |

ポリーヌ シェリエ
Pauline CHERRIER

学位の種類 博士（法学）
学位記番号 法博第97号
学位授与年月日 平成23年3月25日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻 東北大学大学院法学研究科（博士課程後期3年の課程）
法政理論研究専攻
学位論文題目 **Entre Japon et Brésil : identités décalées**
(Between Brazil and Japan : identities out of places)
論文審査委員 （主査） 教授 戸澤 英典
教授 大西 仁
François Laplantine
Bernard Lamizet
Eric Seizelet
Dominique Vidal
Maria Thereza Strongoli

論文内容の要旨

本論文は、日本からブラジルに渡った日本人移民とその子孫である日系ブラジル人について、特に各世代のアイデンティティ形成に焦点を当てつつ、日伯両国における長期のフィールド調査の結果を存分に活用して彼らの歩んできた歴史と現状を詳細に論じた労作である。その際、法学、政治学、社会学、移民研究、コミュニケーション理論等、既存の学問領域の多岐にわたる理論的な考察を行い、まさに学際的アプローチと呼びうる先駆的な業績となっている。

以下、論文の構成に沿って、その概要を手短に述べたい。

まず、序論において、著者は主としてジャック・ラカンの構造主義的な精神分析学を応用しながら、移民のアイデンティティ形成にとって言語が非常に重要であり、それに加えてコミュニケーション理論と記号論の観点からも分析を加えるという理論的アプローチを論じる。この理論的アプローチは、特に、第3部のメディアやサイバースペースにおける日系ブラジル人の活動に関する分析の際に活かされることになる。

第1部では、日本からブラジルに渡った移民とその子孫が置かれた状況とその歴史が概観されている。

第1章では、国民アイデンティティの形成に関する一般的な議論を振り返った後に、日

伯両国の国民アイデンティティについての考察が展開される。日本は「単一民族国家」としてのアイデンティティが相当程度保持されている同質的な国家であるが、ブラジルは国民アイデンティティを語る際にも必然的に *identités* という複数形が意識されるような移民国家であり、国際社会の中では対称的な位置にある二国である。この点で両極ともいえる日伯両国の狭間に置かれた日系ブラジル人のアイデンティティ形成は容易なものではなく、また国際的にも興味深い素材を提供していることが論じられる。

第2章では、日系移民の100年以上におよぶ歴史が叙述される。1908年に初めての移民が笠戸丸でブラジルに渡ったのを皮切りに、人口過剰に喘いでいた農村部からの移民が続々と海を渡った。1930年代になると、数の増えた日系移民をブラジル社会の脅威として捉える動きも起こり、日米開戦と共に連合国側に立ったブラジルで日系移民の立場は一層難しいものとなった。この「勝ち組」と「負け組」に分裂した第二次大戦中の困難を乗り越えた日系移民は、戦後になると農場経営の成功などでブラジル社会に確固とした地歩を築くようになった。

1980年代になると、「経済大国」として世界経済の中心国となった日本とは対照的に、ブラジル経済は累積債務によって破綻の危機に陥るようになった。単純労働力の不足に悩む日本と、ハイパーインフレによる生活苦に苛まれていたブラジル側の思惑が一致する形で、1991年の入管法改正を契機に多くの日系ブラジル人が再び海を渡り、生産ラインの単純労働などに従事する「出稼ぎ」を行うようになった。

第3章では、日系ブラジル人が置かれた「空間」の対称性が描写される。ブラジルの大都市は高い犯罪率で知られ、その公共空間は紛争の地として意識される。その中に日系移民はリベルダーヂ（サンパウロ市内）という自分たちの空間を作り上げ、独特のアイデンティティを育んできた。1990年代以降に日本の工業都市・地域にきた日系ブラジル人は、その多くが安全な地方都市という全く異なる空間に置かれることとなり、公共空間の違いに戸惑うこととなった。

第2部は、「移民の文化的・美学的次元」というタイトルで、移民に関する概念・言葉・神話といったコミュニケーション理論に属する内容が扱われている。

第1章では、日系移民にまつわる「棄民」「出稼ぎ」「ハーフ」「ダブル」等々の言葉について、そうした用語法の背景となる事実も論じながら分析が加えられている。この章の多くは日本語の知識を十分に持たない読者にも全体の論旨を理解してもらうためのものとなっており、日本学の論文として必要な部分とも言えよう。

第2章では、日系移民が経験してきた「神話」が論じられている。ブラジルに向かった移民たちが信じた「約束の土地」というスローガンや、出稼ぎにきた日系ブラジル人たちの目に魅力的に映った「成功という運命」というキャッチフレーズなどが描写される。

第3章では、日本とブラジルがそれぞれ相手方に対して抱くイメージについての分析が為されている。相互に抱かれているステレオタイプの中で、日系ブラジル人がそのギャップと向き合う現状が興味深く描写されている。

第3部は、日系ブラジル人に関する政治的・制度的な問題が論じられている。

第1章では、日伯両国における日系ブラジル人に関する政治制度の概略が示される。特に、1990年代以降に激増した日系ブラジル人の「出稼ぎ」への現場対応から生じた外国人集住都市会議の役割や、日本に居住する日系ブラジル人の教育や犯罪の問題など、これまでフランス語文献ではほとんど紹介されることがなかった事実が明らかにされている。

第2章・第3章では、日系ブラジル人のメディアやサイバースペースにおける活動とコミュニティ形成が取り扱われる。ポルトガル語の新聞・放送・出版や Youtube などのインターネット上の発信を中心とするコミュニティなど、この2章で詳しく紹介されている事例の多くは、著者独自の調査・インタビューに基づく記述であり、他の文献や報道等ではほとんど知ることのできない貴重なものである。

第4章では、日本人ブラジル移住100周年である2008年に日伯両国で行われたイベントの実際を追いつつ、日系ブラジル人の歴史と各世代のアイデンティティ形成、現在の状況が総括的に考察される。日本人移民は移民国家であるブラジル社会も変容させたが、今や日系ブラジル人の存在は日本が多文化を許容しうる社会を作り上げることができるかの試金石となっている、と結論づけられる。

論文審査結果の要旨

本論文でまず特筆されるは、日系ブラジル人の100年以上におよぶ歴史を追いながら、二つの異なる国家／文化の狭間で、現在「6世」にまで及ぶ各世代の日系移民や子孫が如何なるアイデンティティ形成を行ってきたのかを詳細に論じている点である。ブラジルおよび日本での研究滞在期間に多くのインタビューをこなした氏が多くの事例やエピソードを織り込みながら描く歴史叙述は、学術的な著作のレベルを超えて、興味深い人間ドラマの域にまで達している。その際に、日伯両国に直接関係を持たない氏の調査や観察は、中立的かつアウトサイダーであることの有利さを存分に発揮したものとなっており、日伯両国の研究者では掘り起こすことが難しいと思われる側面にまで踏み込んだ事実や心情を明らかにしている。

第二に、日系ブラジル人のメディアやサイバースペースにおける活動について、他の文献や報道では知ることのできない現状を詳しく紹介した点が高く評価できる。この点はメディア研究の観点からも興味深いものであろうが、日伯両国のサイバースペースにおける日本語／ポルトガル語メディアの把握という難しい作業を行ったという点で、両国の言語・文化に通暁した氏の能力が遺憾なく発揮された部分である。

こうした高い評価の一方、本論文は非常に学際的なアプローチを採っており、また時間的・空間的なカバレッジの壮大さゆえに、いくつかの改善の可能性も指摘されている。

まず、日系ブラジル人が直面している法的・政治的問題について、さらに深い分析が可能と思われる点が指摘できる。この点は、本論文が非常に学際的なアプローチをとってい

ることからやむを得ないところもあるだろうが、日系ブラジル人が置かれている最近の日本の状況は法的・政治的議論がその中心にあり、今少しの紙幅をとってもよかったように思われる。

また、日伯両国の他の移民・マイノリティとの比較の視点がやや弱いことも指摘できよう。日本側については「オールドカマー」、とりわけ在日コリアンと多くの点で比較考察が可能であろうし、「移民の国」であるブラジルには、アイデンティティ形成の難しいマイノリティの他の例が多く存在するはずである。

もっとも、これらの点は本論文の価値を減ずるものではなく、また今後活字として発表されるまでに改善されるであろうことが期待できる。もとより、本論文は既存の学問領域の狭間にあるテーマを扱った先駆的な業績であり、国際的にも高い評価を受けるであろうユニークなものと思われる。この点は、審査委員会を構成したフランス、ブラジル、日本各国の審査委員が異口同音に合意したところである。さらに、数多くの興味深いエピソードと流麗な叙述が特徴である本論文が出版されれば、研究者のみならず日伯両国の関係者や一般読者にとっても意義ある著作として受容されることが大いに期待される。

以上により、本論文を、博士（法学）の学位を授与するに値するものと認める。